

「Textbook of Gastroenterology」

in 2 vols.

by Tadataka Yamada

ミシガン大学内科の Tadataka Yamada 教授の編集による「Textbook of Gastroenterology」が出版された。山田教授が今年春の第 77 回日本消化器病学会総会の招待講演者として来日されたのは記憶に新しい。氏は日本で出生されたが、御父上（世界貿易センター理事長）から国際舞台での活躍を期待され、中学校から米国へ留学し、その後米国の消化器病学会のリーダーへと登りつめられたと聞く。ミシガンへ移られる前は、UCLA の胃潰瘍研究センター（通称 Cure）で故 Grossman 教授の愛弟子として活躍され、その追悼が本書の謝辞に記されている。

本の内容は、Grossman 教授も編集に参加された名著「Physiology of the Gastrointestinal Tract」と、教科書として評判の高い Sleisenger 教授編の「Gastrointestinal Disease」の両者の特色を兼ね備えた魅力的なものとなっている。すなわち、前半の約 500 ページを消化管の生理機能に関する解説に充て、それを基礎に診断学、各論が後半に展開される。その際、この本の大きな特色は、消化器

診断学および治療学に力を注いでいる点である。例えば“common GI problem へのアプローチ”と称し、原因不明の体重減少、皮膚病変、遺伝相談、薬物やアルコール中毒、などの興味深い項目や、老年者や免疫抵抗力の低下した患者へのアプローチ、メディカルスタッフの衛生問題などタイムリーな話題も盛り込まれており、教科書を越えた読み物のおもしろさがある。診断治療面でも MRI や PET、内視鏡的治療法にも多くの頁をさいている点に斬新さを感じる。

反面、従来の教科書の定番となっていた各論の部分の充実がやや物足りない面がある。日本で特に問題となる胃ポリープや胃癌の部分の記述が少ないのはともかく、protein-losing enteropathy が独立した項目となっていない。また、潰瘍性大腸炎とクローン病が一括して述べられているなどの点に不満が残る。

しかし、それを補うかのようにいろいろな工夫がされている。すなわち本の他の部分にもその病気の記載がある場合、読者への direction と

して各章の終わりに参照すべき他章を記述してある点、索引では最も詳細に記述されている部分を太字にしている点など、細かい読者への配慮が感じられる。文献も 1990 年まで網羅されている点には驚かされる。日本で同様の企画で本を制作したなら 2 年以上を要するかもしれない。山田教授も 45 歳であるが、執筆陣に現在米国で活躍中の 40 代の若手教授を中心に起用したのが、斬新な話題と最新の知識を多く取り入れることができた成功の秘訣であると思われる。

ところで、日本の読者が本書をひもときるとき、「アメリカ人によるアメリカ人のための」消化器病学の教科書であるという認識を持たなければならない。日本人の執筆者は川井啓市教授をおいて他になく、消化器病による死者の多い発展途上国の現況報告はほとんどみられない。かわりに、「海外旅行者の心掛け」といった項目がみられる。例えば日本人の執筆者を増やすなど、もう少し international な flavor があってもよいとも感じられるが、それはこまめで良く出来た本書に対する贅沢な注文と言えるかもしれない。是非御一読を薦めたい教科書である。

（慶應義塾大学教授・消化器内科）
土屋 雅春

● 2683 pp. 2 vols. 1200 illus (108 in color). 1991 ¥45,000 (税抜き)

J.B. LIPPINCOTT Co. Philadelphia, Pa. 日本総代理店 医学書院洋書部